

山岸茂則(編)

臨床実践 動きのとらえかた —何をみるのか その思考と試行

加藤 浩

(九州看護福祉大学看護福祉学部
リハビリテーション学科教授)

編者の「山岸茂則先生」と言えば、昨年、同社から“実践 MOOK・理学療法プラクティス”シリーズの『運動連鎖～リンクする身体』をゲスト編集され、その内容は臨床現場で活躍中の臨床家に様々な新しい視座を与え好評を博している。その続編となるのが、今回の『臨床実践 動きのとらえかた』である。“実践 MOOK”では運動器疾患、スポーツ障害、神経系疾患、呼吸器疾患、後期高齢者、小児発達障害など臨床でよく経験する主要な疾患に対する多関節運動連鎖の視点からの実践的評価と治療内容が主に紹介されている。それに対して本書では、動作分析の考え方や分析の視点を基本動作である「寝返り」「起き上がり」「立ち上がり」、そして「歩行」などを例に、詳細かつ丁寧に解説されている。つまり“実践 MOOK”が応用編とすれば、本書は基礎編の位置付けであろう。

なぜ今、あえて基礎なのか？ 小生の頭には、ふと、むのたけじ氏の有名な詩(詩集たいまつ I)「より遠くへ跳ぼうとするものは、より長く助走距離を取る」が浮かんだ。基礎の土台なくして実践的な治療評価、さらには治療技術をどれだけ積み上げようとしても、所詮、それは成書の模倣であり、成書の技術を超えることはできない。読者諸氏が、そこからさらに創造的で

新しい理学療法を展開するためには、しっかりと基礎から掘り下げ、臨床実践につなげるプロセスが必要である。本書を読み進むうちに、そのような編者の強い信念と熱い思いが伝わってきた。

さて、本書は大きく 5 部の構成から成っている。第 1 部「動きを観るわけ」では、動作分析の臨床的意義と目的、第 2 部「観察のポイント」では、動作分析をする上で、どの部位(関節)をどのようにして観るのかについて、具体的な例を挙げて詳細に解説されている。第 3 部「動きを診る—動作分析の流れと解釈」では、まず全身的視点で動作(motion)障害のとらえかたについて、その後、局所的視点で運動(movement)障害のとらえかたについて臨床推論の方法で解説されている。ここは臨床経験豊富な執筆者ならではの臨床思考過程が楽しめる。また、全身的視点と局所的視点の双方の視点の重要性が示された部分である。第 4 部「動きを観る前に—動きの相と機能的意味」では、基本三動作に加え歩行動作を相ごとにバイオメカニクスの視点と神経学的視点からバランスよく解説されている。これも本書の特徴の 1 つである。第 5 部「動きを診るための基礎知識」では、第 4 部までの基礎的知識を臨床(治療場面)に応用するための珠玉のヒントが多数紹介されている。その他にも図や表が多用されており、さらに内容を深く理解するための工夫(「なるほど」「Reference」「Check」)が満載で、最前線で活躍中の臨床諸家をはじめ、動作分析をこれから学ぼうとする初心者の学生諸君にもお薦めである。

●B5 判・248 頁・2 色刷

定価 6,825 円(本体 6,500 円+税)

2012 年 文光堂・刊

■とびらページ(p 769)の作品について：作・解説——牧野文幸氏(口と足で描く芸術家協会)

「天高く 馬こゆる秋」

「馬」の字が、走る馬の姿に見えるようアレンジしてみました。

★プレゼントのお知らせ 各号につき 1 名の方に、牧野氏の作品を差し上げます。巻末のアンケートはがきに「プレゼント希望」の旨をお書きいただくか、件名を「プレゼント希望」として E メール(ptj@igaku-shoin.co.jp)にて編集室までご連絡ください。希望する作品名があれば、あわせてお書き添えください。